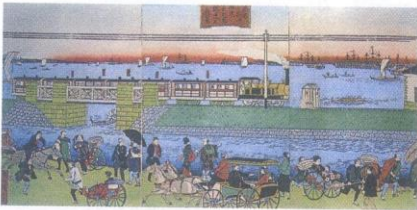


「山手線 駅と町の歴史探訪」(小林 祐一)からの引用。

海を埋め立てて築いた線路

日本初の鉄道が開業した明治5年(1872)、品川～新橋間は、海上に築堤したところを走っていた。築堤の上を蒸気機関車の引く列車が走る錦絵が残されている。陸地に鉄道を敷設できなかった理由は、このあたりの海岸沿いは江戸時代の東海道沿いの町並みであり、すでに市街地化していたため住民の立ち退きなどの問題があった。また、火の粉をまき散らして走る蒸気機関車に対して反対運動が大きかったこと、などもある。

そんな歴史を物語っているのが、高輪橋架道橋。田町～品川間、泉岳寺近くにあるガードで、山手線・京浜東北線・東海道本線のほか、東京総合車両センター田町センターの多数の留置線をくぐる。このガードの自動車の高さ制限は、なんと1・5メートル。タクシーの屋根に載せた社名灯(通称・行灯)がガードの天井にぶつかって壊れてしまうことがあるため「行灯殺しのガード」とも呼ばれるほどで、天井にはこすった跡が数多くある。実はこのガード、鉄道開業時の水路の跡なのだ。錦絵を見ると、築堤に舟が通行できる水路が設けられている。鉄道堤のために海岸と外海が隔てられると、漁師の作業に支障が生じるなどの理由で、鉄道堤には水路が設けられた。その跡のひとつが高輪橋架道橋というわけだ。



3代目歌川広重による錦絵。築堤の上を走る開業時の様子が描かれている



高輪橋架道橋を通過するタクシー。車種はさほど車高が高くないプリウスだが、それでも天井ギリギリ